2019 年　冬の経済教室記録

1　日時：2019 年 12 月 26 日（木）13 時 00 分～17 時 00 分
2　場所：慶應義塾大学三田キャンパス東館 8 階ホール
3　参加者：関係者入れて 94 名
4　主な内容
　進行役：杉田孝之先生（千葉県立津田沼高等学校）
　まず、主催者挨拶と東証の事業の紹介が岡部ちはる氏（東京証券取引所）よりあった。

第一部:基調報告

（1）趣旨説明「新テストと授業改善　基本的な視点の整理」新井明先生（上智大学非常勤講師）により以下資料をもとに、説明があった。

・ネットワークでは過去に入試問題と授業改善のテーマで研究、発信を行なってきた。
・当初は私立大学の入試問題の分析、評価、授業改善が取組まれた。
・その背景には、入試問題、教科書、授業のトリレンマがあり、それを打ち破る必要があったからである。
・今回の新テストは、入試問題を変えることで授業を変えるという明確な意識で作られている。
・しかし、入試（センター試験、共通テスト）を受ける生徒は、高校生の半分。のこりの生徒にも視野を広げる必要がある。
・また、高校入試も変わってきており、中学校の授業の変化も視野に入れることが求められている。
・そのために、学習指導要領と共通テストに造詣の深い大倉先生、中学校から李先生、高校では受験校から杉浦先生、非受験校から金子先生をお呼びして、問題提起と討論を行なう。

（2）問題提起「新テストの出題意図を踏まえて取組むべき中高の授業改善」が大倉泰裕先生（千葉県立松戸向陽高等学校）から資料をもとに講演があった。

・共通テストの英語、国語と数学の記述が問題になって延期などの措置がとられているが、だからといって共通テスト導入の意味がなくなったということはない。
・共通テストで求められている内容は、以前から言われていることで新しいものではない。学習指導要領にはその方向がきちんと書かれている。
・英語にしても、記述式にしても一点刻みで評価することの問題点を踏まえて考えると、それが難しいから導入しないというのは逆に問題である。
・採点のゆらぎやぶれは通常の試験で記述式を導入しても同じ事がおこる。そんな面倒なこと、難しいことを承知でなぜ共通テストで導入するのか。

・それは、マークシートによる、知識、理解を測るような解答では測ることができない力や能力があり、現在それが要求されているからである。
・その背景は、PISA 調査の結果が雄弁に語っている。2018 年の PISA では、読解力に得点、順位とも有意な低下が見られた。
・PISA では、テキストから情報を探し出す問題、テキストの信憑性を評価することに課題があった。自分の考えが他者に伝わるように根拠を示して説明する力に課題がある。つまり出来ていないという結果である。これを克服しなければいけないのである。
・では、生徒に身につけさせたい力とはなんであろうか。これは学習指導要領にもまた共通テストでも書かれている、思考力・判断力・表現力となる。
・学習指導要領を作成した立場から言えば、指導要領は、今の社会はどうなっているか、これからどうなるか、どうするかという分析からはじまり、これから生きてゆくうえで求められている能力とは何かを問うところから作られている。
・そのことを踏まえて日々の授業で発揮することができるかどうかが問題であり、そのための新たな指導がいるわけではない。もし新たな指導を求めるのであれば、それは今までやっていなかったことになる。
・その意味でも、まずはいままでの知識中心の授業の反省あるいは分析が必要になる。つまり、毎日の授業を振り返ることからはじまる。
・その手がかりが、共通テストの試行問題にある。試行問題では、各科目の状況設定が生活レベルや授業の風景からはじまっている。また長大なリード文を読まないと設問にゆけないような設定になっている。国語になったと言われているが、国語の担当者からは社会になったといわれている。
・試行問題「現代社会」を 2 例あげたので、先生方が解いて欲しい。その際、出来たか、出来なかったかで見るのではなく、この問題はこのように作られているとか、このような過程を経て解いていくのかという視点から見て欲しい。
・例えば、p14 の問 7 などは、国語では解けない。常識でも解けない。与えられた資料をきちんと読むことではじめて解ける問題となっているはずである。
・論述問題が話題になったが、試行問題からは、マーク式は知識しかみることが出来ないと言うことではなく、思考力・判断力・表現力などを問うことはできることが分かっていただけるのではないか。
・先生方も、試行問題をてがかりに、ご自身の授業改善を目指して欲しい。

第二部　現場からの提案

(1)「高校入試の新動向と中学校における授業改善」李洪俊先生（大阪市立南港北中学校）

・李先生より資料にもとづき提案があった。

・三つ話したい。一つは、新学習指導要領の方向性と入試問題の分析の視点。二つめは、高校入試問題の新傾向ということで具体例を挙げる。三つ目は、新傾向を見据えた授業の提案である。

・一番目は、入試問題分析の視点である。新学習指導要領が改訂されるが、その方向性が使われないと解答出来ない問題が出題されているかどうかということである。

・それを三つの視点から分析した。視点 1 は、注入型から主体的な学びが必要となる出題になっているか。視点 2 は、思考力・判断力・表現力を使わないと解答出来ない出題か。視点 3 は、社会的な見方・考え方を働かせ、そして汎用力を必要とする出題か、である。

・入試問題を分析した結論的から言えば、新傾向は見られる。公民的分野に限定されるが、次の 5 点があげられる。1 記号問題から記述式へ、2 最近の話題や時事問題が多い、3 新しいグラフや最新の統計資料が出てくる、4 リード文・説明文が長文になっている。5 三分野融合・教科横断的問題が増えている、である。

・二点目にゆくが、具体的には、山形県の問題、群馬県の問題、福井県の問題、石川県の問題、長野県の問題などがそれにあたる。
・確かに変わってきているが、その傾向に対して疑問もある。一つは、資料や説明文が長いことにより、社会科より国語力の問題になっているのではないか。二番目は、社会的で一般化した総合問題は、常識で解ける問題になってきているのではないか。三番目は、教科横断的・問題解決型の問題が増えると、社会科の三分野の特色がなくなるのではないかという点である。

・三点目に、新傾向を見据えた授業提案を三つ提起したい。
・一つは、文章や統計資料・グラフを多読させることである。これには、教科書を読む、資料・グラフに触れる、調べ学習が必要になる。家庭学習を活用することも求められる。
・二番目は、時事問題＋地理的分野、歴史的分野との連結を心がけることである。これには、1 年生から新聞を活用して、短文でまとめる練習をさせることが求められる。
・三番目は、基礎基本用語の文章化である。書かせる訓練をする。そのためには、穴埋めをやめて、説明文にするなど、書く練習が求められる。
・課題学習のテーマやこれから予想されるテーマをあげておいた。また、このような授業実践をされている二人の実践家の例（咲くやこの花中の川村先生、島本一中の飯島先生）も紹介しておく。

(2)「新テストに向けての授業づくりの試み」杉浦光紀先生（東京都立井草高等学校）
・杉浦先生より資料にもとづき実践報告と提案があった。

・自己紹介のあと、新テストで求められていることの具体例として、スミスの『国富論』を扱った平成 30 年の試行問題「現代社会」第 4 問をとりあげる。
・この問題は、知識で対応できるが、読解力も必要な問題（問 1)、資料・設問の読解力、質の高

い理解や思考力・判断力が必要な問題（問 2)、知識で対応出来るが、考え方の具体例への活用も求められる問題（問 3）などで構成されている。

・報告者の分類では、平成 30 年の「現代社会」試行問題では、約 45%が活用を中心とする問題であった。

・ここから、以下の授業の設計とゴールに設定すべきことが抽出される。

・平常の授業では、日々の学習と社会や生活との関わりが見いだしづらい。したがって、授業を改善して、問いをもち、その問いを概念や理論をもちいて考察し、対話や討論を行ない、論述することで社会や生活に対する視点や使い方を身につけるような授業が求められる。

・さらに、ゴールでは、選抜試験の準備を通して、将来の大学での学習や研究活動ができる知力を保証すること、社会生活での諸活動ができる情報や技能を保証することが求められる。

・次に、実際の授業の例を紹介する。対象は 2 年生「倫理」の授業である。ここでは論述の考査問題をあげておく。これは、「学校で自由を学ぶことができるか」を 200 字で書く問題で、カントまたはミルの思想に言及する（用語として自律、他者危害原則を使う）という条件をつけている。

・この問いに答えることができるために、考え方を資料から読解する、考え方を活用して対話する、考え方を活用して論述するという三つのステップで授業を展開している。

・生徒の書いたものを提示しておく。このような形で授業をすすめるために、これまでに扱ったテーマや問いの例（現代の問題と先哲の思想の概念・理論）をあげておく。これらの例は実際に授業で使ったものである。また、授業で身につけさせたい力を測るために、読解と活用を必要とする評価問題も作成した。

・最後に考える「公共」と新テストに求めたいことをあげる。

・大学入学共通テスト問題作成方針からも、現代や生活の問題に概念や理論を活用する授業改善が新科目「公共」や新指導要領の公民科科目には求められる。

新テストでは、複雑な設問や文章・図表の形式的な情報処理の問題ではなく、人文・社会科学の文章・資料にもとづき、公民科が担う知識の具体的な応用を要する問題を作成して欲しいと要望したい。

(3)「新テストの理念を生かす授業改善の試み」金子幹夫先生（神奈川県立三浦初声高等学校）

・金子先生より以下の資料にもとづき実践報告と提案があった。

・杉浦先生の提案が新テスト受験者を意識したものにたいして、私の提案は受験しない残り 50 万人を意識した提案になる。

・教材作成のプロセスを紹介する。勤務校は農業科がある学校である。そこに新テストを意識した授業づくりを命じられた。そこで、教材さがしをはじめた。まずはデータや資料を読み解く力があがる素材はなんだろうという自分自身への問いかけからである。

・その結果、生徒の実態にあわせると、短いこと、面白いこと、教科書に戻しやすい内容の三つの条件が浮かび上がる。そこで、登場したのが『レモンをお金にかえる法』の続編である。すでに前編は授業で紹介していたので、その点からも無理がない。
・テキストは決まった。次は、読ませる工夫、戦略が必要となる。そのために、絵本をばらばらにして、カードを作り、それを元のストーリーに組み立てるという教材にしようと考えた。
・カードが小さい、カードが多すぎる、カードをつなぐ言葉がない、登場人物が多すぎるなどの浮上した問題点を試行錯誤で解決しつつ、教材として教室に持ち込んだ。
・その時には、教科書との関連を探させて、問いに答えさせるようなワークシートを用意した。それは、単なるおもしろ教材ではなく、資料を全員に読ませ、考え方をイメージさせ、それをきちんと教科書に戻すという教材の開発が求められているからである。授業風景を映像で記録しているので紹介する。
・紹介した事例は一例であり、新テストを受験しない生徒にむけた新テストが要求している授業改善を一緒に考えていただきたいと思っている。

第三部　討論

・進行役の杉田孝之先生のもとで、基調報告者大倉泰裕先生、李洪俊先生、杉浦光紀先生、金子幹夫先生による討論が行なわれた。以下、その模様を要約する。

（1）提起者四人の先生の補足

杉田：四人の方から報告の補足をいただきたい。

大倉：話をした内容に関しては建前部分が半分ある。現在の学校は忙しい。私も 20 時間の授業をもち進路指導主事をしている。学校の様子も金子先生と同じような生徒たちである。それでも思考力を育てる授業は必要であると思っている。生徒は、言葉を使いこなすこと、つまり表現力が十分でない。だから、例えが出来ない。思考実験が実験にならない。指導では、読める字を書く、誤字脱字をなくせと言っている。相手はどのような気持ちか、自分の言葉がどう受け止められるかを考えよと言っている。そこからやらないとダメな現実がある。それでも、教科を通して生徒たちがまっとうに、きちんと生きていける人間に育てたい。教科だけでなく、学校のカリキュラムをかえる努力も必要だと言いたい。

李：授業では ppt を使いながらやっている。単元の最後に高校入試問題を使っている。中学校は教科書を終わらないとダメなので時間的にはきつい。また、最近の生徒は全体的に幼くなっていて自分を構って欲しいという要求は強いが、他者まで目がいっていない。だから討論にならないことが多い。高校入試で出るようなまた新テストでの授業のような思考力を育てる授業をやっている例としては、夏の教室で紹介されたような「咲くやこの花中学校」の川村先生、NIE や討論会を主催している飯島先生の実践がある。それは、中高一貫校だったりスーパーティーチャーだったりする。私も出来る範囲でみならっている。今、新聞を廊下にはって生徒の目にふれさせるようにしている。指導要領の目指す人間像を受け入れ、それで頑張ってみたい。

杉浦：前任校がチャレンジスクールだったので、現在の学校に異動して、逆に高校生ってこん

なにできるんだという印象を持っている。とはいえ、読解力に関しては、やはり課題の生徒もいる。公民科として、人間と社会の在り方を考え、批判的に見る視点を教えたいと思っている。

金子：紹介した授業のなかで、グループで話し合い代表が結論をもってきなさいと指示をだした。ところが一人一人がもってきて、見て欲しいとわらわら集まってくる。そんなときに「並べ、帰れ」とは言えなかった。「わかった」という瞬間を共有することで生徒をその気にさせることができそうだ。さらに、新テストが求める力を育てるために「それ教科書のどこに書いてあるの、資料のどこにあるの？」と聞くスタイルですすめてみた。

(2) 定期考査の問題、とりあげる思想家

杉田：補足に対してフロアからの質問がなかったので、私から。高校入試の事例に、正解をすべて選べという問題があったが、日頃そんな問題を作っているのか？

李：点数が低くなるので、そのスタイルはやらない。生徒は平均点をとても気にする。基本的な選択問題の割合を60から70点分出題して点が取れるようにしているが､厳しいものがある。それもあって、記述問題は甘く採点している。

大倉：大学入試でも、プレテストの平成 29 年にその種の問題がある。18 歳選挙で有効な投票を 8 つの選択肢から正しいものをすべて選ばせる問題である。正答率は 4.9%である。これをどう考えるか。この状態でよいか。出題方法として一つ一つ〇×を付けさせれば良いというテスト専門家からの声もある。

杉田：自分が力をいれた開発教材、体験型教材は、どうしても舞い上がってしまう。他者からの目が必要になる。その点から、杉浦先生の教材ではカントが取り上げられているが、ソクラテスは、ロールズやサンデルは、仏教史などは入るのか。教材の選択の基準は？

杉浦：取り上げられていない思想家は夏期講習や 3 年の選択講座でカバーしている。思想家には面白いな、いけるかもしれないという人物と、必ず扱わなければいけない人物とは違うと考えている。広げられる人物から、テーマを扱うようにはしている。また、思想史の流れの中でその他の思想や人物は扱うようにしている。

(3) 解決学習と入試、生徒の変化

フロアからの質問：李先生へ、解決学習をやってゆくことが入試対策になるのか。全体のなかでのバランスをどうしているのか。中学校で教科横断型の授業はあるのか。大倉先生へ、生徒が幼くなっていると指摘されたがどんなことで原因は何か。

李：問題解決、探究型の授業はぶっちゃけて言えば年間 2～3 回できればよいくらい。個人的には教師自身がおもしろいなと思うものを年 1，2 回やるくらい。先に紹介した川村先生の学校は高校入試がないから、一年で地理、二年で歴史、三年で最後のまとめレポートと段階を踏まえ

て実施できる。公立は１月にすべて終わって２月から高校入試準備になる。教科横断型の授業はない。学年の他教科の先生と情報交換するのが関の山が現実。

大倉：生徒に関しては教員としての体験からしか発言できない。教育行政の立場から現場に戻って、大変なクラスの生徒たちと格闘し、落ち着かせた。その生徒たちも卒業式には、はちゃけたが、それでも「今日くらいは大倉の言うことを聞く日だ」という発言をして卒業した。今は、そういう「仁義」を見せる生徒はいなくなった。おとなしいが直接体験から学ぶというより仮想のなかで生きているようだ。スマホに対する執着心は異常なくらいだ。就職や進学の志望動機もスマホで書いてくる。そういう環境の変化にまだ学校は対応しきれていない。スマホを学校にもってくるなは無理だろう。そういう現実からつめてゆかなければならない。

(4) 読解力を付ける指導とテスト

杉田：入試で変わるのは進学校だが、それ以外の学校も変わらなければならないとして、今の生徒は文章が読めない。文章を書くと接続詞がないなど問題が露呈している。そんな現実で、長文を読ませる工夫をやっている人はどのくらい？（会場、反応なし）いない。では、杉浦先生に　質問。先生の定期考査の問題は新テスト風に文章を読ませるものになっているが、作問にどのくらいの時間がかかっているか？

杉浦：時間は覚えていない。考査のなかで三人の思想家を比較する問題をだしたが、これは、自習時間に生徒に問題を作らせる課題を出した時に、その原型があり、それを使った。また、選択問題の選択肢は比較的楽しく、考えながら作った。

杉田：長文を読ませることに関しては、私もなかなか取り組めなかった。避けてきたとも言える。新テストに関係ない学校でどのように取組むのか。

金子：読ませる教材をいきなり出しても生徒はくいつかない。教師が素材をどのように調理するのかという包丁さばきが求められる。いきなり読ませるのではなく、例えば新聞の写真のよみとり、新聞のグラフの読み取りからねらわせる。文章でいえば、間違い探しのようなゲームにするという方法もある。

李：社会科で長文を読ませることはやっていない。生徒の力からはできない。比較的長文なのは道徳の教科書の文章。これでも、生徒は一つ読むのに 15 分程度かかってしまう。生徒は 10 分で集中力がきれてしまうと言われている。廊下を走り回る、取っ組み合いをしている生徒を教室に座らせ、教科書を音読させることが精一杯。それでも生徒はマンガは読む。

杉田：音読より黙読の方が効率的という評価もある。予習で読むような課題があるか、また、これなら読むというような勘所はどんなところか？

杉浦：まだ卒業生がすくないので、高校の学びが大学での学びにつながっているというケースはもっていない。これまでの素材では、ハイジャックのケースや、9・11 テロ事件のケース、フェイクニュースからイドラへなどの教材は良かった。使えると思う。これからを考えるに値する素材を探す必要はある。

(5) 探究活動と単元

フロアからの質問：李先生へ。探究活動は単元が終わってからなのか。大倉先生へ。中学校では単元を重視するが、思考力・判断力・表現力と言った場合、単元ごとにみるのか、それとも個別に時間ごとにみるのか。

李：探究活動は、単元が終わってからというより、学習のまとまりのなかで配置している。また、入試問題の活用は実力テストのなかで行なっている。

杉浦：高校での探究活動は単元で考える事はあまりなく、流れのなかで考えさせている。また、生命倫理や環境倫理などで探究活動を行なう場合は、単元では考えていない。

金子：大学にゆかない高校生にとっては大きな単元と小さな単元にわけて考えることが有効だと思う。大きな単元では，本日は経済教育の研究会なので経済についての大きな問いを設定してみてはどうか。例えば、いろいろな教科書や資料集は経済学習のはじめにA・スミスの写真を掲載している。どうしてどの本もスミスなのか？という大きな問いを共有するのだ。すると次に「交換と分業」と教科書に書いてある。どうして交換なのか？分業するとどういうことが起こるのか？交換はどのような仕組みでおこなわれるのか？というように小さな問いがたくさん出てくる。これが 1 つひとつの小さな単元における各問いである。つまり、大きな核のある問いからはじまり、小さな問いを 1 つひとつみていく。最後にもくじをみて、問いをつなげるストーリーを語れるようにするのが私の目標。

大倉：単元と言うよりまとまりのある学習は必要。例えば、民主主義と立憲主義の二つで政治学習の問いを立てているかを振り返って欲しい。立憲主義を中学生に教えていますか？（会場反応なし）このような問いは一回の話では定着しない。何回もやる。そしてテストでも見る。高校の「現代社会」は 2 単位。60 時間がせいぜい。全部やったら駆け足でしかできない。しかし、指導要領では教科書に書かれていることを全部やれとは書いていない。「幸福・正義・公正」を軸にして、重点的に、かつくりかえしてやるのが教育の基本になる。

(6) 参加型学習とテスト、まとめ

杉田：参加型の学習をやっている人はどのくらい？（会場、約半数が手を上げる）参加型の学習では三枝先生の「授業が変われば、生徒が変わる」という言葉がある。今回の討議のテーマで言えば「テストが変われば、授業が変わる」ことが期待されている。最後に、本日言い残したことを一言各先生からいただきたい。

金子：教材研究する金子はどんどん抽象化の世界に向かっていく。しかしそこで得たものをそのまま教室には持ち込めない。教材化するためには抽象化したものを単純に具体的なものにすればよいというものでもない。生徒はどのような状況なのか？教材が発信するストーリーの条件をどのように整備するのか？このようなことを考えながら教材を具体化させてゆきたい。

杉浦：論述問題で出来ている生徒の成長をこれからも見てゆきたい。

李：わからないことを生徒と一緒に楽しんでゆける教師であればよいと思う。

大倉：かつてセンター試験でローレンツ曲線が出題された。それがきっかけで教科書にそれが入った。テストが変わると教科書、授業は変わる。今回の試行テストでは文字数も多くなった。そこから見ても授業は変わらざるを得ないだろう。その際には、受験関係者だけでなく、例えば、自作のテストを「見てね」と渡すような、若い先生たちに刺激を与えるベテランの指導が求められる。会場の先生方にも若い先生を育てる指導をお願いしたい。

杉田：これから一題でいいから、改善した授業をもとにしたテストを作りたい。私もいままではそれをやっていなかった。0 が 1 になる。無限大に大きくなる。入試を起爆剤に授業をかえてゆきたい。

総括

篠原総一経済教育ネットワーク理事長

・本日のシンポジウムは、経済教育ネットワークにおける会員の研究活動の一端である。
・この 10 年来とくに、経済教育ネットワークでは、日ごろの生徒の学習が入試問題に引きずられる、だから生徒を「日ごろから、資料を理解し、それに基づいて考える」方向に誘導するような入試問題にして欲しいと訴えてきた。そして、今回、新テストでは、入試問題がようやくそのような方向に向き始めた。
・ところが、今度は、テストが変われば授業も変わるが、その授業をどう変えるのか、先生方が新たな問題に直面していらっしゃる。今回のシンポジウムは、そのような課題にこたえる最初の試みであった。経済教育ネットワークでは、これからも、会員の先生方に限らず多くの先生方と共同で、経済の問題、たとえば貿易や金融の教え方などに焦点を合わせて、「生徒が資料を理解し、それをもとにして考える」授業の開発を試みたい。

以上、冬休み経済教室は終了した。　　記録・文責：新井